

2021 年度日本語教育学会秋季大会 大会若手優秀発表賞（口頭発表） 受賞コメント

雍婧（一橋大学大学院・修了）

この度は「大会若手優秀発表賞」をいただきましたこと、大変光栄に存じます。

拙発表は、日本国内の大学院で日本語教育を専攻し、卒業し帰国し、ノンネイティブ日本語教師として就職した3名を対象に、複線径路・等至性アプローチを用い、彼らの認知の変容プロセスの可視化を通し、その認知の変容プロセスに及ぼす影響要因を探ったものです。実際の調査では、調査協力者の3名の事例から、<日本語教師に関心を持つ>から<積極的に授業の改善を継続する>日本語教師になり、将来像を具体化するまでの径路を複線径路・等至性モデル図によって可視化しました。その結果、3名の「現場」「ノンネイ



ティブ日本語教師」「日本語教育」の捉え方に関する大きな変容があり、その変容が成長の過程にある様々な経験と相互に深く関わり合っていることが確認されました。また、3名とも<積極的に授業の改善を継続する>教師として活躍していますが、各教師の留学経験と社会的環境が径路選択の支えや妨げの要因として影響することで、教師が辿った径路が2つに分かれました。特に、教育実習の結果と研究分野の内容がノンネイティブ日本語教師の日本語教育観に大きく影響することが確認されました。

私自身も、ノンネイティブ日本語教師の一人として、「ノンネイティブ日本語教師の役割は何か」「ノンネイティブ日本語教師が自身の強みや特質をどう捉えればよいのか」を常々考えております。日本語教師養成や研修は、教師認知と最も関連すると指摘されている先行研究がたくさんありますが、具体的にどのように関わり、何が教師のビリーフとなり、何がそれを変化させ、どう変わってゆくのか、あるいは、変わらないのかは、よくわかっていない現状です。そこで、文献調査を通して、日本語教育学研究におけるノンネイティブ日本語教師認知研究の方向性を明らかにすることに取り組むとともに、本研究ではノンネイティブ日本語教師の認知の変容に焦点を当て、ノンネイティブ日本語教師認知を捉え直していくことを試みました。本研究は、私の研究活動において出発点となるものでもあり、まだまだ未熟な部分が多いです。今回の受賞を励みに今後も研究を進め、ぜひ多くの方と知見を共有できればと願っております。

最後になりますが、この度の受賞は、一橋大学の西谷まり先生、太田陽子先生、国立国語研究所の石黒圭先生の厳しい指導なしには決して得られるものではなかったと思います。本当にありがとうございました。そして、一橋大学言語社会研究科で共に学んだ皆様、調査に参加してくださった協力者の皆様に心よりお礼申し上げます。さらに、審査員の先生方、並びに発表を聞いてくださった皆様、質問をしてくださった皆様に改めて感謝申し上げます。

* 雍氏の2021年度春季大会における発表要旨は、[こちら](#)からご覧いただけます。

2021 年度日本語教育学会秋季大会 大会若手優秀発表賞（ポスター発表の部） 受賞コメント

堀美宇（岩手大学大学院生）

この度は名誉ある賞を頂戴し、身に余る光栄です。

本発表は、災害時に活用されている「やさしい日本語」研究において、双方向型の伝達場面を想定した研究が少ないことに着目しております。そして双方向型の伝達場面では、相手の文化背景や災害の知識・経験への配慮に加え、より個別的な対応が求められることから、「やさしい日本語」を作成する際に必要な言語形式以外の要素を抽出するための試行実験結果について発表いたしました。試行実験の結果として、文法的な配慮を行い、さらに具体的な指示とその理由や原因を追加した「やさしい日本語」表現を聞いて避難行動を選択してもらった場合の方が適切な避難行動につながる傾向にありました。また災害の知識や経験があっても災害リスクが低くなるとは限らず、避難行動等を知っていても実際はパニック等で行動できない、あるいは過去の地震経験に基づく行動をする可能性があることがわかりました。



本研究についてですが、予備調査から外国人が持つ災害に関する知識や経験が日本人と異なると、災害に対して危機意識を持てなかったり災害リスク回避方法に違いが生じたりする可能性があるかと考察しました。そこで、本研究では文法外の要素を「文法外のやさしさ」とし、地震発生時に伝達する情報内容で配慮すべき「文法外のやさしさ」の要素を抽出・整理し、外国人の災害リスク回避への影響を示したいと考えております。

本賞を受賞した今、大変嬉しく本研究に対して自信を持つことができました。本研究のような災害時のやり取りを想定した研究は、今後の日本語教育の防災教育分野等に貢献できるのではないかと考えております。しかしまだまだ未熟な研究であり、改善しなければならないことが多くあります。特に研究手法は課題に感じておりますので、引き続き皆様からご指導をいただけますと幸いです。

本発表を通して、災害時における外国人対応を考える際には、対応する日本人側が「どのようなところに配慮して行動するべきか」が視覚化されるきっかけになればと考えておりました。ただ、本発表は私にとって初めての学会発表でしたので、まずは研究に関わってくださった皆様のご協力を無駄にしないよう出来る限りの力を出し切ろうと思っておりました。それと同時に、自分ない視点でのご意見やご質問を頂戴し、今後の研究に生かすためにより多くのやり取りが出来たら良いと考えておりました。双方向型の「やさしい日本語」や相手の災害の知識や経験等に配慮する「文法外のやさしさ」に対して、どのような評価をいただけるのか不安な気持ちもありましたが、当日は楽しく発表、議論ができたと感じております。今後は本大会で頂戴しましたご意見やご感想、疑問点等を生かせるよう、より気を引き締めて研究に邁進して参ります。最終的には、実際の現場で活用できるような成果物を考案できればと考えております。

最後に、基礎から教えていただきました松岡洋子教授、研究にご協力くださった皆様、深く感謝申し上げます。そして本大会の審査員の先生方、ご意見や疑問点をくださった皆様、聴講者の皆様に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

*堀氏の2021年度秋季大会における発表要旨は、[こちら](#)からご覧いただけます。